

門前町の形成と社寺の機能

— 伊勢国山田の場合 —

はじめに

伊勢国山田については、いわゆる伊勢神宮（外宮）の純門前町として理解し把握されている。果してそうであろうかという疑問から本論は発している。というのは、都市の考察に当って発生論的分析と機能論的分析とを混同してないかということである。

さて、伊勢神宮は私幣が久しく禁断され、天皇家の氏神なり国家の宗廟として長らく閉鎖的な信仰のもとに庶民社会とは遮断されてきた。中世に入っても源頼朝次いで足利將軍という一握りの特権層の参宮が主流で、庶民の一般参宮は足利時代中期以降である。したがって、それまでは門前町の形成、発達は考えられない。すなわち、山田の発達過程は必ずしも門前町としての発達過程そのものではないということである。

わが国において都市が発生してくるのは鎌倉時代中期十三世紀中頃からである。当時山田はすでに成立しているが、その都市的性格は古代国家の貴族社会的系譜の上に立つものであり、古代商業市場的都市であった。中世に入って

莊園からの貢租をもとにますます商業的集落となつていった^⑧。すなわち、あくまで商業的都市で門前町ではなかつた。門前町の性格をもつに至るのは戦国、織豊の動乱期を経て社会が安定し参宮が本格化する近世に入つてからであり、他方私幣禁断も中世以降漸次弛んでいった。また米遣の封建社会にあつて、貨幣の流通も十分でなく、神領という狭い地域社会で門前の住民が参宮者の経済に依存するだけではその生活は困難であつたらう。しかも庶民とは直結しがたかつた別格の神宮であれば尚更であり、門前町が成立するためには一握りの特定階層の参宮では不可能で、多くの国民ことに当時としては農民層の参宮にまで普遍化しなければならない。古代の貴族、中世の武士に代つて一般庶民が参宮の中核になるには近世まで待たねばならなかつた。したがつてそれまでの門前町の機能によつて生ずる利益を受けたのは住民の極く一部で、それは参宮者に参拝上の便宜を提供した御師達に過ぎなかつたであろう。事実御師を保護するため町宿に対して営業制限の掟書がしばしば出されているのである^⑨。近世においてさえこうした情況であるから中世においてはなおそらく町宿自体成立が困難であつたらう。したがつて御師ならびに神宮奉仕の關係者を除けば、門前町なるが故の恩恵を受ける人々は少なかつたのではないか。換言すれば山田は純粹な門前町ではなかつた。

しからば山田の発生発達の基盤は何んであつたか。もちろん第一は神宮であり、その鳥居前の地域である。しかしその発生の契機となつたのは市場機能であつて宗教的機能ではなかつた。そしてこの市場集落を核として、勢田川沿い集落の港湾機能と、宮川沿いの渡津集落の渡河機能とが付加されていった。すなわち鳥居前の市場機能を中核として、二つの機能が結合して宗教都市山田を完成するのであつて、その時期は近世である。

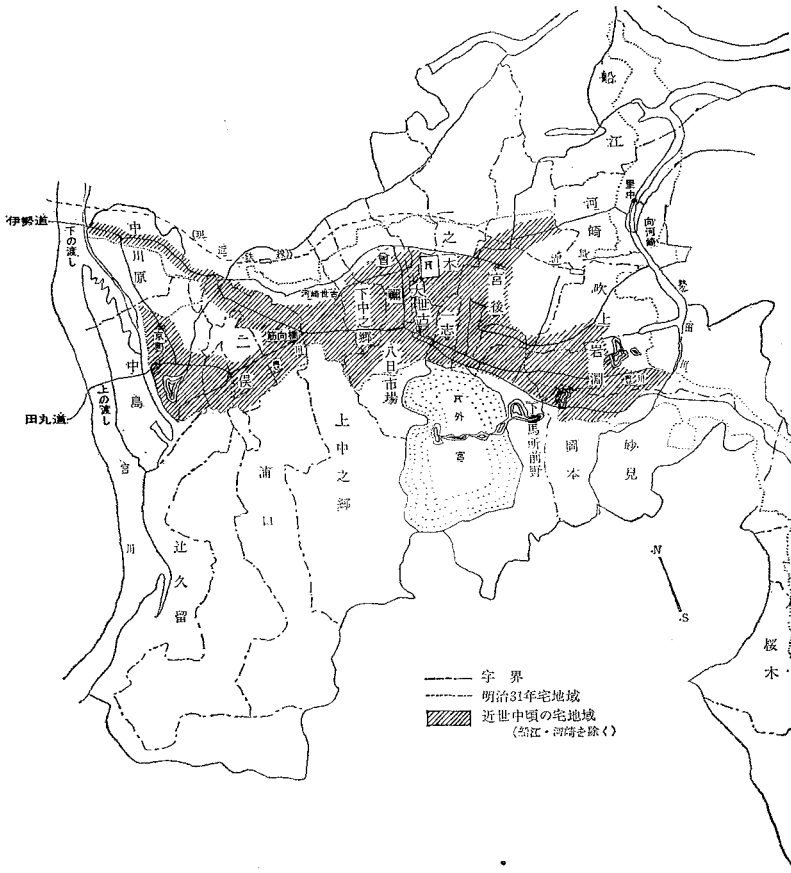
1、鳥居前の市場集落の成立Ⅱ山田中核部の形成

平安末期地方土豪によって開發が進行し、鎌倉時代に入つて武家支配体制が強化されるとともに、農業の集約的經營が進み農業生産力は増大した。そして余剰農作物が市場に放出され定期市場が平安末には現われてきた。これらの市は社寺の門前や国府、郡家の所在地、交通の要地、港湾の所在地に立つのが普通であつた。こうした社会情勢のもとにあつて、鳥居前山田は市場發展のためのすぐれた条件をそなえていたといえる。すなわち外宮の門前であることを第一に、古い市の様式である農民と漁民という生産者同志の直接交換の条件をもつていた。それは伊勢平野の農業地域と志摩地方の漁業地域を控えていたことである。また大湊の港津と勢田川水運を通じて直結する便に恵まれていた。ことに神領として守護不入の地で豪族の圧迫を受けることも少く比較的自由的な經濟活動が行ないやすかつた。

こうした商業的基盤の上に立つて市場集落が発達し、それが、参宮の盛行とともに宗教都市の性格を具備するようになり、近世に入つてから後者の卓越をみるに至つたのである。換言すれば市場集落の上に鳥居前町が発展しているのである。奈良の場合も同様な発達をとげている^⑧。

こうした商業機能の卓越は、多くの座の存在によつても裏付けされると思う。山田には米座、麴座、酒座、魚座、鯛座、瀬戸物座、御器座、釜座、布座、麻座、紺座、油座、紙座、綿座、立物之座、アへ物座、瓦座、連雀負之座など多くの座が成立していた^⑨。また魚店については「上座・中座・下座ノ魚店モ市ノ遣制ナルベシ^⑩」の記事を伝えている。

さて中世の市場を形成したのが三日市場(岩淵町)・六日市場(下馬所前野町)・五日市場(岡本町)・八日市場(八日市場町)の各町通りである。ことに八日市場町は上市場として、岩淵町は下市場として栄えたのではないかと思われる。



第1図 山田町域

八日市場町には毎月八の日に、二本の道路の両側に市が立ち、「八日市場、此地有二市場、毎月八日成レ市、故曰三八日市場ニ也、其法今亡矣」^⑥とあり、字市場にあった上座蛭子社（上座恵毘須）はいうまでもなく市の神で、これを采配していたのが御師幸福大和家であった。また当町には大主家があり、大塗師と称し塗師の棟梁でここには相当数の職人が居り^⑦、著名な伊勢漆器の産地であった。また下市が毎月三日の日に岩淵町にたてられ、ここには三日市

夷社があり、字三日市世子にその後を伝えている。また御師三日市大夫は当町に居住していた。当御師は三方家で奥羽・上野・松前など東北地方を中心に三五万余に及ぶ檀家（安永六年）を有していた。岡本町は山田の里ではもっとも早く住民の定住をみた所で五日の日に市が同じく立った。五日市蛭子社は字上ノ切にあり古の道饗の地と伝えている。ここは外宮から内宮に向う口に当り、文明一七・一八年（一四八五・八六）頃に山田の神人が番屋を設け、内宮への通路を塞ぎ参宮者を阻止している。また寛永一七年（一六四〇）九月に山田奉行花房志摩守の下知によって坊山のふもとから中道と称する新道が外宮から内宮への参宮路として開かれて便となり、往来が繁く民家も増加して黄楊櫛・漆器などの産地として賑わっている。岡本町の櫛が山田の名産として参宮者に喜ばれたことは多くの記録に残っている^⑩。岡本町の参宮者による賑いがしのばれる。

下馬所前野町は文字通り外宮一ノ鳥居の前で下馬する場所であった。字下館に六日の市が立ち宮市場と称した。六日市蛭子社は菑社とも呼ばれ、下座の夷または中座の夷という説が残っている。

かくの如く外宮の鳥居前には多くの市が立ったが、中世の市は三齋市が主であったから一ヶ月に十二日の開市である。市日の間隔が不同であるのは市日と祭日に関係があること^⑪からその影響であろうか。事実三日市は後に市日が変わり、六月と十二月の月次祭、九月の神嘗のいわゆる三節祭の時に行なわれ、ことに十九日の月夜宮祭の祭日には大市が立った^⑫。

中世後期の神宮神職団の活動によって神宮崇敬の風がおこり、ことに外宮は農業神として当時の農業社会における重要な信仰対象であって、近在の多くの農民を集め市はいよいよ繁栄したと思われる。こうした中世の例は各地にみられ、相模国当麻は市場町であり同時に時宗の本山無量光寺の門前町であった^⑬。

さて、いかなる物資が交易対象となつたのであろうか。まず宮川、櫛田川流域を控えた伊勢平野南部の農産物と、志摩地方の海産物であろう。前者は単なる宮川と櫛田川の沖積平野ではなく、洪積台地・河岸段丘・氾濫原・三角州・浜堤・海岸砂丘・後背湿地などの微地形が交錯しており、当然土地利用は単一なる稲作のみではない。古く荒妙・和妙の産地として知られ、麻、桑、綿などその他畑作も盛んであった。これらと志摩地方のアワビ・サザエ・エビ・テングサ・生魚などが主なる交易品であつたと思われる。志摩地方の魚類を采配したのが山田河崎町の魚問屋であるから、おそらく勢田川の水運を利用して山田町中へ持込まれたであろう。ちょうどそこに岩淵町・岡本町の市がある。このほかのルートからも志摩地方の魚類が山田町中に入つていたことは、これらの浦方から山田に通ずる道路上の要地に御贄小屋が置かれ販入される魚の一部を神宮への供進用として徴取されており、そうした御贄小屋の存在によつても明らかである。

古来社寺門前は社寺のみでなく領主の財源として彼等は商人に保護と特権を与え、さらに隷属する手工業者を擁し自給のみでなく交易も行なわれ、門前という土地柄から乱暴狼籍もなく秩序が維持され、また門前の市場は神聖なものとして取引の公正が保証されていた。さらに需要者の集中にも便であり、市庭としてよく利用されてきた。かくて中世後期には多くの社寺門前は商業的性格を強めるとともに人口を増大し都市として成長していった。

こうした中世後期の都市の趨勢が市を發展させ、市場の存在が集落存立の基礎となつていった。

山田の場合参宮者が増大するまでは、市に集まる人々は当然山田及び周辺在方の人々であつて、ことに近世に入つて松阪が城下町として発達するまでは伊勢平野南部地域最大の町方として市の機能を發揮したと思われる。天正年間(一五七三—九二)には一五座もありその商業活動は活発であつたろう。こうして近世門前町成立以前すでに市場町

としての下地があったわけである。さらに近世中期に入り国民大衆の参宮が普遍化し、最高頂に達すると参宮もやがて個人の自由な信仰心からの発意によらず、習俗という一種の社会的強制から参宮する者も多く、当然その旅は物見遊山化の傾向となってきた^⑩。したがって門前の市場町はいわゆる門前町の機能を要求されるようになり、賑いを呈してきた。

近世に入ると周圍論に立てば畿内に近い伊勢としては、市場商業から店舗商業に交替し、すでに市は衰退期に入るわけで、市場が残存するのは特異な現象である^⑪。ちょうどこれに対応するかのよう参宮が盛んとなり機能的に門前町へと転移したのである。したがってその転移は極めて円滑であつたと思われるが、人口は後述するように減少している。すなわち参宮者の増加と山田の人口増減は正の相関関係ではない。換言すれば門前では市場という経済的機能のほうに宗教的機能より多くの人々を集中させ支持し得たのである。近世における御師の分布をみても、この市場地域に最も多くの居住をみるのであつて^⑫、見事な転移を示したのではなからうか。

2、渡津集落の発達Ⅱ山田町域西部の形成

鎌倉時代以来の神宮御師の活動が室町時代に入って本格化し、さらに荘園崩壊期に当面して神宮の財政危機が深刻化したため、神宮側の積極的な社会進出があり、南北朝・室町時代に入って伊勢参宮も徐々に盛んしてきた^⑬。

かくて参宮者は漸次全国的となり、長享元年（一四八七）には諸国洛中の者が群参し、降雨のため伊勢宮川橋が落ちて、数百人が溺死するという惨事がおこっている。以来宮川の架橋は行なわれなかつたらしい。さらに延宝三年（一六七五）八月四日には渡船業者が船賃をむさぼる余り大勢の参宮者を乗せたため渡舟が沈み溺死者数十人を出す

という事件が起っている^⑤。

全国からの参拝者にとって最後の関門はこの宮川である。宮川渡河の参宮者の運送については、いろいろの方途がとられたが、地元運送者が不法な専横をなすことが多かった。近世に入ると山田三方と宇治年寄の共同支配下におかれた。渡河には参宮街道の伊勢道を小俣から中川原(宮川町)に渡る「下の渡し」一名「桜の渡し」と、伊勢本街道の田丸道を川端から中島町へ渡る「上の渡し」一名「柳の渡し」の二つがあった。そこで小俣―中川原と川端―中島という二つの対向集落が成立した。ことに中川原と中島町は今までの長途の旅の疲れと、いよいよ神都に入った喜びの参宮者を迎え入れる渡津集落として大変賑わった。すなわち各御師の配下である殿原、仲間たちや、軒をつらねる茶屋の茶屋女たちがにぎやかに迎えた。ここに山田の町の一つの核が成立していった。

中川原は宮川町と称し宮川の中洲の川原であるため領域が変動し、かつて度会郡高向郷で「宮川ノ東、人家列レリ是ヲ中川原ト云フ、諸国参宮人ヲ爰ニ出迎ヘナドスル茶屋アリ、山田市市中ト野路十町ヲ隔テテ此人家皆市中ヨリ引移リテ漸ク百年ノ事也」^⑥とあり、参拝者を待つ集落として栄えていた。しかし当時(宝暦年間)はいまだ山田市中とは連担しておらず野路十町をもつて隔っている。かつ山田から引移った人々から構成されている。

中島町も宮川の中の島の地であった。勅使・上使なども宮川を渡河してここに出で、山田に入ったことは中島町の一小字に京町の名が残っており、これらの参向使が京に上る町筋に当たる意がこの地名である。

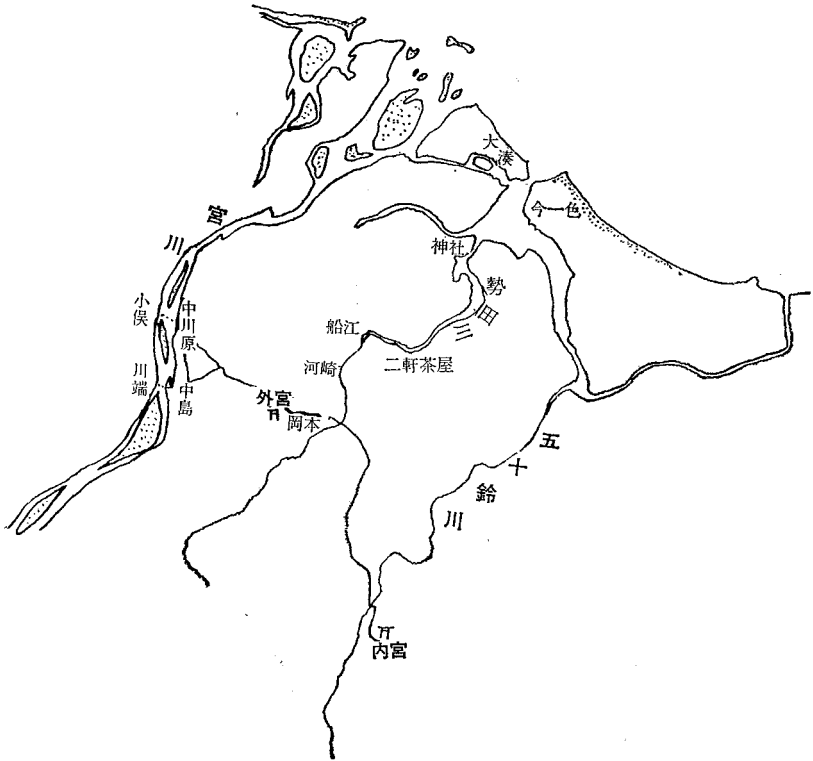
要するに宮川渡しのたもとに宮川町・中島町を中心とする渡津集落が成立して、山田の西郊における一つの核を形成していた。そして少くとも宝暦年間(一七五一―一六四)には未だ山田町中とは結合していなかった。しかるに中世における参宮の障碍となっていた戦乱、山賊や海賊のぼっこ、無数の関所が織田信長、豊臣秀吉によって統御され、

最後に徳川家康の全国支配によって排除された。かくて徳川治下に入るや参宮の盛行をみ渡津集落も繁栄し、ことに宮川町と中島町は非常な発達を示し漸次東進していった。そして市場を中心とする外宮門前の中核と連担することとなり、その結節点に当たったのが筋向橋である。すなわち筋向橋地域にあたる浦口町、上中之郷町で市街地はもつともくびれているのもこのことを示している。この伊勢道と田丸道の交点である筋向橋以西を上之郷といい、上中之郷町・下中之郷町を中之郷と称したことも、その発達過程を異にした地域であることを示している。

また筋向筋より東北に通ずる所に河崎世古があるが、その名については「昔筋向橋ノ辻ノ東ニ八人家五軒アルノミニテ町家ナシ、故ニ此処ヨリ末ハ川崎へ往ク路ナリト云フテ川崎世古ト云ヒ此ヨリ川崎マデノ際ニ人家一軒アリテ、往来ノ者之ニ休息シタリ、是今新町ノ一ツ屋ナリ」^⑧とあり人家稀なる地であることを記している。

3、勢田川流域の発達Ⅱ山田町域北部の形成

律令体制が崩壊し神宮に対する国家の財政的援助が後退するにつれて、それに代わるものとして神宮は新興の東国武士の援助を得る必要があった。そして多数の荘園（御厨・御鹽）の寄進を得ることに成功した。それらの多くは伊勢・尾張・三河・美濃などに集中し、そこからの貢進の品々は多くは海上から送られてきた。その受入れ港が大湊である。ことに中世に入り世情が不安動揺すると陸上運送が困難となり、水路によることが多くなり、ために大湊は大いに賑わい問や倉がならぶ繁華な港町となった。元米大湊は塩の積出港として発生したのであるが、一二世紀頃から伊勢両宮の外港として各地に散在する御厨や御鹽の神饌米や御にえ、神供類を調進する舟の出入する港として、さらに両宮神職の衣食類売買の便をとる港として繁栄していた。後堀河院から貞応二年（一二二二）三月十六日に御綸旨な



第 2 図

らびに諸廻船御法令三拾七ヶ条御条目なるものを受けている。以降南北朝時代には北畠伊勢国司が南朝のため吉野方面と東国を結ぶ中継地としてここを軍港とした所である。また義良親王の奥州下向のときに兵船五十艘余を調達し、北条早雲・織田信長等の需にも応じている。さらに豊臣秀吉の小田原出陣の際には大船三百艘が指し廻されており、また朝鮮半島出兵のときにも九鬼嘉隆の兵船などを建造している。徳川時代に入ると家康以来徳川氏にも事ある毎に大船拾艘余を指し廻わしている。かくの如く古くからの造船業の盛んな地であった。他面室町時代には国内および対明貿易の商港として栄え大廻船業者を生んだ。主なものとして

は桑名屋・浜松屋・信濃屋・小浜屋があり、中世末東南アジアとの貿易に活躍した角屋七郎次郎も大湊出身である。かくて大湊は商港のみならず工業港・軍港としての機能を併せ有していた。そこで徳川幕府も重視し、寛永十八年（一六四一）から幕末まで山田奉行を置いた。その繁栄は自治体体制へと進行し有力廻船問屋が合衆を構成していた。それは堺にも匹敵する強力なものであった。また蒲生氏郷が天正一六年（一五八八）松ヶ島から松阪に移って城下を建設するとき大湊の町人に移住させていることも商業の発達と商人の活躍を示している。角屋七郎次郎もこの折に松阪へ移住した。このほか「大湊古来家数千軒廻船大小百式拾艘余田島高凡千石余……」^⑩とあり、また「凡大湊高城ハ諸国ヨリ米穀・魚鱗・材木・柴薪・海藻ヤウノ物マデモ両宮領内へ運送スルノ通津ナリ」^⑪とあり、その繁華の様子が知られる。この繁栄の基盤となったのが山田の外港という地理的位置であった。尾張・三河・遠江・駿河など東海地方さらに東国からの参宮者は渥美半島から海路伊勢湾を横断してここに至った。伊勢湾が荒れて渡海困難なときには伊良湖神社参拝をもって神宮参拝に代参としたこともこれを裏書きしている。

寛政年間の三方会合諸旧例書には

「大湊 但シ元在方之頭ニ候処去亥正月 町格ニ被仰付候 以後万事町並ニ有之事」

とあり、山田付属の村邑から町方になっている。また豊臣秀吉の文禄年中の太閤検地に際して宮川以東は竿を入れず「大神宮御敷地」の名のもとに無税地となしたが、そのときの朱印状末尾に「伊勢 山田惣中・宇治惣中・大湊惣中」と併記されており、大湊の地位の高さを示している。

海路大湊に入った参宮者は、さらに勢田川をさかのぼって神社港や二軒茶屋、さらに山田の船江・河崎・岡本町へと廻航してきた。ここに中継地としての大湊と終航地としてのこれら河港を発達させた。今も「勢田の流れの入舟出

舟わけて賑う御蔭年」と俗謡に歌われている。

神社港も三河・遠江など東国や志摩・熊野方面など海上からの参宮者の上陸地として賑わった。皇太神宮儀式帳や延喜式によれば尾張・三河・遠江などは神宮の神戸となっているから早くからこの地方との交通が開かれていたものと考えられ、その基点となったのがこの大湊なり神社港であろう。

大湊を勢田川水運を通じて山田に連結させたのが河崎町である。町は山田との交通上勢田川左岸（西岸）に成立し当時発展の中心となった字里中もここにあり、著名な通市場も左岸にあった。右岸（東岸）は向河崎と称しあくまで二次的な地域でしか過ぎなかった。また寛永七年（一六三〇）美濃国の代官岡田伊勢守が山田奉行として来任したとき奉行役料・水主衆の扶持米等を美濃国より徴収して納めたという美濃倉はここ右岸にあり^④、また山田奉行は備荒貯穀の目的で、この地に佃穀倉を寛政四年（一七九二）に建て米穀と貯蔵している。かくて向河崎はあくまで集落立地が主体ではなかった。

注目すべきは近世の山田において米問屋は河崎町に限って設置を認められており、享保頃には仲間が十人ばかりであった。宝暦三年（一七五三）十二月には河崎町米問屋共から会合所を経由して山田奉行水野甲斐守に問屋仲間の設置を願出て問屋掟書を受けている。こうした事実から河崎町が山田における米穀の流通機能の中心であったことは明らかである。他方山田消費の魚類も志摩地方鳥羽藩および紀伊・田丸領の浦々から入荷し、河崎町の魚問屋から河崎町魚買人を経て山田町中に入った。その魚市場は著名であった。すなわち

「宇治山田近辺之鳥々より山田河崎町へ 入津の生魚、塩魚等……」^⑤
とあり、さらに続いて

「段々近年高直に相成候て、惣中迷惑仕候処……」

とあり、その値段調節のため享保五年（一七二〇）に問屋定書が制定されている。安永二年（一七七三）七月には河崎町魚仲間人を五人と定め、すべて問屋より仲間買入れるよう定めたが、同年十月荷元の反対で五人仲間を廢し多数をもつて相場を立てるように旧に復した^⑧。また河崎町が神宮と深い関係にあったことは「古來神宮ヨリ河崎ニ河守ト云フ役人ヲ置イテ運送ノ分一ヲ取ラシムナリ」^⑨とある。

船江町は勢田川と宮川の分流である北宮川（甫藏主川・檜尻川・小柳川などとも称す）の合流点にあたり、ふなあえ（航變）の地であったのが語源といわれる。堀留なる小字は舟行の便のため大溝を掘ったのをここで止めたといわれる地であるが、やはり勢田川舟運によつて成立した集落である。

これら勢田川沿いの港町と山田の戸数を比較すると次の如くである。

年号	西暦	実数			指数 （寛文一〇年＝一〇〇）		
		船江	河崎	山田分	船江	河崎	山田分
寛文一〇	一六七〇	三三六	八五三	九七四一	一〇〇	一〇〇	一〇〇
明和八	一七七七	三三七	七一九	七二四七	一〇〇	八四	七四
天明八	一七八八	三五六	六七六	六二九四	一〇六	七九	六五
寛政三	一七九一	三三八	六五三	五五八〇	一〇〇	七七	五七
文政元	一八一八	三一九	六七三	五五一八	九五	七九	五三

すなわち近世における山田郷全域の戸数は減少しているのに対して、二つの港町の減少率は低く港灣機能を通じて都市活動を持續しているとみられる。

4、まとめⅡ三地域の結合

山田は近世に入るまでは外宮門前の岩淵町(三日)・下馬所前野(六日)・岡本町(五日)・八日市場町(八日)等を核とする市場集落地域と、中島町・宮川町を中心とする宮川の上の渡し・下の渡しに蝸集する参宮者を対象とする渡津集落地域と、大湊を基点に神社町・二軒茶屋町・船江町・河崎町と続く勢田川水運に基盤をおく港町地域の三地域がそれぞれ連担することなく分立発達を上げていた。ところが近世に入り、参宮が盛行するとともに中核である市場集落地域は地元在方との交易よりも参宮者を対象とする経済に転換して発展膨脹し、浦口町・上中之郷町付近で渡津集落地域と連続するに至った。他方勢田川水運地域とは河崎町でもって結合したが連担することはなかった。というのは河崎町は参宮者よりも米問屋・魚問屋などによる経済活動を中心とする方向へ独自に発展していった。またこの地域は宮川の分流清川が西から流入し低湿地をなし、また南からは豊川が北上して吹上町の河原をなしていた。かくの如く居住条件が恵まれず集落立地に制約があった。また勢田川水運が便であるからそれ以上に集落の発達の必然性がなかった。

要するに山田は三つの機能をもつ地域の結合によって成立したものが宗教的機能の卓越によって漸次門前町化していった。

近世における三つの核の戸数変動^⑧をみても、渡津部と港町部が發展ないし現状維持に対して鳥居前の中核部は激減を示し、また新興の結節部にあたる浦口町、上中之郷町の減少も著しい。すなわち鳥居前は参宮現象よりも市場活動の方が町の發展に寄与していたわけで、多数の外来の客よりも土着の経済活動が町の發展には大きな力をもって

いたことを示している。換言すれば山田全体が門前町化することによって市場集落時代の核であった八日市場などが相対的にその地位を低下させたのである。

注

① 矢崎武夫 日本都市の発展過程 一〇二頁

豊田 武 日本の封建都市 一一頁

原田伴彦 日本封建都市研究 二八頁

② 宇治山田市史 六〇六―六一〇頁

例えば「陽田古今雜記」に次のような記事がある。

置目條々

一 諸国御參宮衆本宿へはかくしをき町方にてはご同ク宿仕候者本宿被聞出可被仰候急度相尋可申付候事

一 諸国御禮那本宿無合点ニ為私與申合代物をかし御宿申者於在之は改嚴重ニ可申付押而代物かし申候ハ、かしそんたるべきこと

一 船江之御道者右同前之事

以上

天正十七年五月十九日

上部越中守貞永 印

町野左近助重仍 印

③ 小野晃嗣 門前市場としての奈良

- ④ 御巫清直 徴古文府
毎事問
- ⑤ 郷談
- ⑥ 土地雜記
- ⑦ 宇治山田市史 六三〇頁
- ⑧ 例えば
- 宮川夜話草の櫛の項に「岡本町に此良工多し、其品数ありて他國へ送れり」
伊勢參宮名所図会の岡本里の項に「此地に造る櫛を岡本櫛といふ、櫛にて作りて大神宮へ献ずる例あり、故実有るとぞ」
伊勢參宮案内記に「昔は岡本の里と云ひて、家居まばらにありしとかや。今は人家棟を比べて繁昌の町となれり、櫛工多うして名物とせり」
- ⑨ 千葉徳爾 地理学と日本民俗学との接点 人文地理一五卷三号
- ⑩ 大西源一 參宮の今昔 二六一頁
- ⑪ 中島義一 市場集落 二七頁
- ⑫ 新城常三 社寺と交通 一二三頁
- ⑬ その特異な現象例として近江国八日市を挙げられている。喜多村俊夫 地方市場の發展残存とその要因に関する歴史地理的研究 人文地理二卷四号
- ⑭ 前掲書⑫ 八〇頁
- ⑮ 前掲書⑫ 一三九頁
- ⑯ 宮川夜話草 宝曆年間
- ⑰ 昔物語
- ⑱ 大湊関係古文書 乍恐申上大湊由緒之事 神宮文庫蔵
- ⑳ 前掲書⑱
- ㉑ 神境紀談

- ㉑ 前掲書② 七五四頁
- ㉒ 三方会合記録 神宮文庫蔵
- ㉓ 前掲書② 五九九―六〇〇頁
- ㉔ 前掲書②
- ㉕ 地域別年次別戸数指数

機能地域	町名	年次						
		寛永一四 (一六三七)	寛文一〇 (一六七〇)	宝永三 (一七〇六)	延享四 (一七四七)	寛政三 (一七九一)	文政元 (一八一八)	嘉永三 (一八五〇)
渡津地域	中島町	一〇〇	一一五	一五〇	一三〇	一〇八	一一〇	九一
新興地域(結節地)	上中之郷町	一〇〇	一〇三	一〇三	七二	五六	五四	四四
市場地域	八日市場町	一〇〇	一〇〇	七九	六四	四三	四一	三七
港地域	河崎町	一〇〇	一二六	―	―	九七	一〇〇	―
山田町	中	一〇〇	一一八	―	―	八一	七七	―

〔付記〕 本研究は昭和四二年度文部省科学研究費(代表者立命館大学谷岡武雄教授)の助成によるものである。